と掲載されたすべての歌に◎○△の点と評語を朱で書き、「これたけ佳作に富んでるとは思はなかつた実に愉快である」と書き送っている。

明治四十一年は左千夫にとって、甲之の「アカネ」との対立が表面化した年であるが、彼はそのような対立を忘れて、心の許せる信州の「比牟呂」の同人たちに囲まれて生涯を送りたいという気持ちを強くしたようである。この前後、たびたび信州を訪れた左千夫は篠原志都児らの住む蓼科高原に長期にわたって滞在し、そこから「比牟呂」同人に

蓼科に埋骨の地を得たしの念頻に起る十坪の地と方丈の仮庵を結び吾か余生をこゝに籠りたい余り老人しみたと笑ふ勿れ青年時に恋の奴となる事ある心事と同状なるへし（明41・10・13付　胡桃沢勘内宛書簡）

と伝え、また東京へ帰っては、志都児に宛てて、

小生ハ一人東京に居つても信州の真の同人が沢山あると思へは少しも淋しくは無之候黄塵万丈の都に住むとも天の一方に信州の空を眺めて心は永久に清き感致候（明41・10・19付）

と述べて「比牟呂」同人たちとの一体感を示している。

四十二年九月、「アララギ」が東京から発行されるようになったとき、「比牟呂」は「アララギ」と合併する。先にも述べたようにこの合併は「アララギ」にとっては、その基盤を強くするもので歓迎できるものであるが、「比牟呂」にとっては、一種の被吸収合併であって同人たちに反対が起こりそうなのにその形跡が見当たらない。この年六月十日付で、赤彦が望月光男宛に

比牟呂トアララ木ト合併シテ東京カラ新ニ出シタ方宜イト思フ如何賛成シロ　左翁ニス、メ玉へ

などと、むしろ信州の「比牟呂」側から合併を積極的に進めようとしているのは、まだアララギの側から合併の条件が提出されていない段階であるということも考慮を要するが、やはり、先に見たように赤彦を中心とする信州の「比牟呂」の同人たちと左千夫との間に強い連帯の意識が短歌を通じて生まれていた結果であると考えられる。

以上述べてきたことを要約すると次のようになろう。短詩型文学においては、作家を育てようとする場合、感情を共有する「場」が必要であるが、甲之の「アカネ」にはその「場」が希薄であり、赤彦の「比牟呂」にそれが濃厚に存在し、それが土台となって左千夫は自己の作風を信州の歌人たちに移すことになっていったということである。「比牟呂」と「アララギ」との合併が円滑に行なわれたのもこのためである。

ら出す「アララギ」は左千夫や蕨真という個人の力にばかり頼らずに、在京同人たちの協力によって刊行してゆこうとしていることがわかる。歌については左千夫の指導、金銭面では蕨真の助力をまだ必要とするが、これからは若い同人たちの協力で「アララギ」を発行してゆこうとする態度が見て取れる。これは「馬酔木」や蕨真の出した「阿羅々木」の時代には見られないところであった。このようにして若い編集者の手に移った「アララギ」は九月、十月、十一月、十二月と月々発行されてゆき、「アカネ」が七月に休刊したこともあって、一応の安定を見るのである。

なお、この「アララギ」は、明治四十二年の九月、東京から発行されるようになったのを機に、信州の「比牟呂」と合併、このことが「アララギ」を軌道に乗せる大きな力となった。最後に、この「比牟呂」の「アララギ」との合併について、左千夫や赤彦などの書簡を通して見ておくことにしよう。

「比牟呂」は「馬酔木」より半年ほど早く、明治三十六年一月に俳人の岩本木外や歌人の久保田山百合（島木赤彦）らによって諏訪で創刊された。初期には信州の根岸系文学雑誌として、俳句、短歌、新体詩、写生文等を載せ、どちらかというと俳句に比重がかかっていた。ところが、号を重ねるにしたがって俳句の寄稿者が減っていったのに対し、短歌の方はふえてゆき、終わりのころである四十一年ごろになると、純短歌雑誌の様相を示すに至る。

根岸短歌会の機関誌として中央から発行された「馬酔木」や「アララギ」などでも、明治四十年代には同人の人数が少なくて経営に困難が伴ったのであるから、信州の一地方から短歌雑誌を継続して刊行することは、作品の面でも経済面でも極めて難しかったのである。しかし赤彦は

今度ノ比牟呂ハ四十頁バカリニナツタカラ定価ハ二十八銭トイフ高イモノニナツタ我々熱心者ノ仲間ハ二十八銭デモ三十銭デモヨイガ一般ノ人ニハ気ノ毒デナラヌ比牟呂ハ今後全国ヲ相手ニシテ活動スルノ覚悟ダ少クモ信濃ノ青少年ニハ今後我党主張ノ貫徹スル機会アリト信ズル（明41・6・2付、篠原志都児宛書簡）

と熱意をもって刊行に努力し、作品を寄せた門下の人には

今比牟呂の至急分が発送終つて志都児と茶を飲みつゝ此手紙認め候解嘲歌大に面白く候君の真情が直截に活きてゐるから読んで生動して居り候（明41・2・18付　胡桃沢勘内宛書簡）

などと激励している。こうした熱意と努力のために、最初は木外が中心で、それを助ける位置にあった赤彦が「比牟呂」の主宰者の位置を占めるようになり、俳句・短歌雑誌として出発した雑誌は純短歌雑誌へと変貌してゆく。

赤彦はこのように「比牟呂」を中心とした信州の歌人たちを収纜するとともに、会員に「馬酔木」や「阿羅々木」、新聞「日本」等への出詠を奨励、信州の「比牟呂」勢力はその面でも各地の根岸派歌人たちから注目される。

「馬酔木」「アララギ」を主宰した左千夫はこの雑誌に注目し、深くかかわった一人で、三十七年二月の一巻七号に寄稿して以来、短歌、文章等を寄せるとともに、選歌を担当、労を惜しまなかった。

それが最もよく表われたのが四十一年三号（明41・9）の場合で、この号では、短歌「瓊の音」六首のほか、「北山短歌会選歌評」と題する長文を執筆、また都波奈会の選歌も行なった。そして雑誌ができる

その事情についてここに記すと、甲之は六月十三日、千葉県山武郡成東に赴いて、蕨真・蕨桐軒の二人に会い、「阿羅々木」と「アカネ」の両誌を共に休刊にし、かわりに両者が合併して年四回歌集を刊行することで話をまとめた。東京に帰った甲之から左千夫は十四日にこの話を聞かされたのである。六月二十七日、同人の民部里静宅で左千夫・茂吉・千樫・里静の「阿羅々木」側在京同人たちの席に、蕨真の代理として橿堂が上京して加わり、それと「アカネ」側の甲之とが二誌の合同について話し合ったのであるが、この話し合いは決裂し、左千夫らは「アララギ」を東京より継続発行することを決定するのである。

左千夫の門下で、最も両誌の合併に強い反発を示したのは茂吉だったようで、彼は七月二日付の古泉千樫宛書簡で

あの日の翌日蕨氏宛に又自分の思つた事だけ簡単に書きおくり候処、少々感情を害された様に見受け候につきこの事に就ては全然沈黙を守る旨書き送り申候

と述べて、蕨真が甲之と和解、「阿羅々木」を「アカネ」と合同させようとしたことに抗議の手紙を送ったことを知らせ、

余は左千夫門人で足れり、根岸短歌会同人でなくともよし、（中略）。桐軒氏は余の考は偏僻だ、と申し、アカネでさへも合同するに至りたるこの際云々と申され候が、アタラズサワラズの人間は幸なるかなと存じ候

といって甲之との和解を拒否した。そして八日付の千樫宛の書簡では「僕は何時でもよい甲之と鉄拳を闘はす」とどこまでも対決してゆく姿勢を見せている。

これらの手紙を眺めると、「アカネ」との和解を考えた蕨真と、それに強く反対する茂吉・赤彦らとの間に、「アララギ」同人の間で大きく分裂があったことがわかる。六月十四日、甲之から報告を聞いて、発行人である蕨真の意向ならと一旦は同意を示した左千夫も、二十七日の会談では茂吉らの強硬な態度の影響もあって、合併の了解を取消すに至ったものと考えられる。

なお、茂吉はその後、七月十一日には立川で蕨真・石川純・堀内卓らと多摩川歌会を開き、「アララギ」を東京で発行することを決定している。左千夫は、前日に三兄岩沢久吉の妻ふさが急逝したため欠席、十三日に左千夫宅を訪れた在京同人や蕨真から十一日の会合の結果の報告を受け、これを了承する。九月一日に東京から二巻一号を発行することとなり、編集は月々交代の輪番制、最初は石原純の担当と決まった。その辺に就て左千夫は赤彦宛の七月二十三日付書簡で

アラヽキの改革ハ蕨真か毎月十円つゝ出金不足分ハ在京同人六人にて分担の約に候されハ売れなくても必す続行の決心也一冊四十八頁位編輯ハ各員順番にやる筈歌ハ左千夫選勿論選外あること元のアラヽキの如に候

と知らせている。

東京発行の「アララギ」二巻一号は題名をカタカナに改めて、予定どおり九月一日発行された。編集を担当した石原純は「東京にて」で

従来のアラヽギは蕨真君の独力経営に成り居候ものなれども、東京に於て活動せんが為めに一切の責任を編輯同人に於て分担することゝ相成候、尤も経済上の点に関しては今日の事情尚多くの補助を同君に仰がざるべからず候へ共、之れとても成るべくは其幾分を各人に於て負担して雑誌の基礎を安定に保続したく編輯に就ては毎月十日を期して編輯会を開き万事を定むることと致し候

と述べている。右の左千夫書簡や「東京にて」を見ると、新しく東京か

二十日の両日、同人たちに手紙を書いて感想を述べているが、それを見ると「諸同人の歌は実ニ振つてゐるのが愉快に候」（島木赤彦宛）、「アララギ届き候事と存候思ひしよりハ諸同人の作歌振ひ居何より嘻しく候」（胡桃沢勘内宛）などと同人たちの作歌に満足を示しつつも「アラ、ギは真の山人の編輯故愚な事も多からんと存候御見のがし願上候」（岡田撫琴宛）などと、左千夫の意にそわぬ編集についてもどかしさを漏らしている。これは左千夫が主宰した「馬酔木」とちがい、「阿羅々木」は蕨真の編集・発行となって、左千夫は不慣れな蕨真を助ける位置にしかいなかったので、直接原稿の取捨などまでは手が出せなかった不満を表わしたものであろう。

「阿羅々木」一巻二号は四十二年一月一日に発行される。一月三日発信の蕨真宛の書簡は

アラ、ギ届申候総て上々吉の出来大ニ嘻しく多大なる御労を謝申候委細ハ精読之上　早々

と「阿羅々木」の編集が、よほど軌道にのってきたらしい文面である。先の創刊号では、中心的な歌人も平の歌人もいっしょに並べるなどの不手際が目立ったが、こんどはそれがあまり見られない。これは、左千夫の「今後御編集にハ可成名のしれた人を先に出す方よろしく候」（明41・9・26付）などの助言が功を奏した結果と考えられる。

次の一巻三号の「阿羅々木」は四月三十日に発行される。左千夫は蕨真宛に三月八日付で、「貴稿只今とゝき申候選歌ハ早速御送り可申候」、九日付で「急　アラ、ギ原稿全部見了只今御送致候」と仕事を迅速に処理し、三月中に発行できそうな模様にもかかわらず、発行日が四月三十日、実際の発送が五月五日ごろになったらしいのは不思議である。創刊に際しては、先にも記したとおり、「禀告」で年に六、七回発行すると告知していたが、このような状態でそれが困難になった結果、この三号の「禀告」では「本誌は春夏秋冬の四回発行と更め候」と言っている。

三井甲之の「阿羅々木」批判、左千夫攻撃はその後も熾烈に続けられた。五月一日発行の「アカネ」三巻四号でも、甲之は「歌壇漫言」で左千夫の歌を明星調、修辞が混乱、川柳のようだなどと非難している。これに対して左千夫は、直接対抗する姿勢はとらず、「阿羅々木」一巻三号で「東京より」と題して、「本誌と『アカネ』との関係にも困り候、云はんと欲する事を云へば角立ち、云はざれば誤解を招くの恐れ有之候」と書き、甲之を「軽率な断言を下すことは、最も戒むべき事に候」と戒めている。甲之の攻撃的な姿勢だけが目立ち、それは非難の域を越えて声高な悪口雑言となっている。

ところが、六月十八日付の岡新治宛左千夫書簡を見ると、状況が一変する。その書簡は、

アカネの言につき懇なる御詞難有候、小生も最早一言も申間敷存居候処三四日前三井氏突（ママ）来訪いろ〳〵なことを書いて済ませぬ云々と有之且つ「アカネ」も七月限りで廃めるとの話に候今更惜しき心持致候若い人々のすることは更に分り不申候

というものである。この「阿羅々木」と「アカネ」との和解について、左千夫は六月二十日付の篠原志都児宛書簡でも触れ、

「アカネ」ハ七月号にて廃刊の由「アラ、ギ」も少しダレ居り候蕨と三井とハ何か善後の法方（ママ）ニ就き相談したの話に候只々私心のみに駆られて事をする連中の了簡ハいつ変るか分り不申候斎藤君ハ後来必ず同志の為に雑誌発行する様に申居候

と記して、甲之はもちろん、蕨真に対しても不快の念を見せている。

ラギ二十五年史」において

私は過去を追懐して当時の事を例を以て云ふなら、例へば私がアカネ発行所に行つて居た。そのとき三井甲之は集つて来た歌稿を整理して居た。甲之がたまたま篠原志都児の歌稿に出会つた。而して突如として、「あ、こいつあ左千夫の弟子だ！」かくの如くに甲之が云ひながら碌に志都児の歌稿に目を通さないで片付けたといふ風であつた。

と述べているが、それと同じようなことを左千夫も四十一年四月十日付の堀内卓宛書簡で、

アカネへ貴詠及び中村君の歌を送り稿末ニ小生選と附記しやり候処それが癪にさはり候とかニて出し不申候小生ハアカネの為にせんとするも向ふにて妙にくねられ候故如何としても致方なく候

と報じ、同月二十八日付のやはり堀内卓宛の手紙でも「小生がよいといへば三井は殊更に嫌ふらしく」云々と、左千夫の推した卓の新体詩が「アカネ」四月号に載らなかったことを伝えている。

このような状態で「アカネ」への寄稿を中止し、甲之との反目対立が決定的になっていった左千夫らが、別の雑誌の発行を考えるに至ったのはいつごろであろうか。

その点については八月十九日付篠原志都児宛書簡を見ると

本月初蕨君上京雑誌発行の計画ニ就き相談有之二ヶ月ニ一度位ッツ出す事ニ候小生主動者ニハ無之候へとも勿論精々尽力之考に候

（中略）新雑誌「アララギ」へ是非何か出せ小生の方へ送つてくれ給へ

と言っている。蕨真が八月初めに上京して左千夫を訪問し、その席で上総から新しい雑誌「アララギ」を蕨真を発行人として刊行することが決まったものと考えられる。

左千夫は志都児への場合と同じ趣旨の手紙を島木赤彦・長塚節・望月光にも発信している。胡桃沢勘内にも出されたらしいが、これは今日、封筒だけで、中身を欠いている。この手紙も同じ趣旨のものであったと推測される。名古屋の依田貞圃へは八月二十三日付で発信。これらの歌人が旧「馬酔木」の同人の主だった人物で、左千夫はこれらの歌人たちに新雑誌の刊行を知らせ、協力を要請している。なお、すでに八月初旬に蕨真と相談して刊行の話がまとまったのに、左千夫が旧「馬酔木」同人たちに通知したのが十九日とか二十三日とかであるのは、やや、その間に日がたちすぎて不審であるが、八月中旬に左千夫宅は床上浸水の水害にあっており、そのために左千夫の歌人たちへの連絡が遅れたかと考えられる。

右のように左千夫が旧「馬酔木」の同人たちに働きかけた結果、九月中旬には彼のもとへ原稿が相当数集まってきたらしい。九月十三日付で

アラヽキの原稿ハ甚た盛なり諸同人の歌とり〳〵に振へり愉快限なく候君は何故送稿なきか未た三四日間ハ間合ひ可申候

と志都児に報じ、十五日付で同じ趣旨のことを長塚節にも言っている。

「阿羅々木」の創刊号が出るのは四十一年十月十三日で、編集兼発行人は蕨真、発行所は蕨真方の埴岡短歌会となっている。「禀告」のところには「本誌は当分の内、一ヶ年に六回或は七回発行の予定に有之候」とある。この創刊号には蕨真、左千夫、節、赤彦、茂吉、千樫、勘内ほか計二十五人が作品を寄せている。ほとんどが旧「馬酔木」同人である。

このようにして創刊を見た「阿羅々木」について、左千夫は十月十九、

の決心あり、今後諸同人の活動上必要上の時期に際せば何時なりとも、独力経費の一切を負担して道のために尽すところあらんと誓はる

と述べているのは、新雑誌の誕生以前に右のように左千夫らと甲之との間に深刻な対立があって、その後のなりゆきに左千夫や蕨真らが危惧の念をいだいていたことによると考えられる。

明治四十年二月六日、「アカネ」一巻一号が「編集兼発行者　三井甲之助」「発行所　東京市本郷区駒込千駄木町五十番地　根岸短歌会出版部」として創刊される。この雑誌を根岸系の歌人たちがどのように考えたかを書簡の中から探ってみよう。

まず左千夫は、四十一年三月八日付の堀内卓宛書簡で

アカネ二号をどう見るかとの御たつね小生も大抵君と同感に候三井甲之は頗る陰険なる男にて小生の考なとは到底彼と一致しかたく候初めはよい加減なことを申居り今日にては蔭ニ而小生の悪口なと盛に申居候由小生も漸くいやニ相成候歌もあれてハつまらなく新体詩なとは一つも物になつたのは無之候（中略）アカネもあの調子では長持も出来間敷候さすれは蕨真資を弁して更に馬酔木を再興可致候へはまづまづ傍看して居り可申候

と反発を隠さず、四号（明41・5）で選歌を担当したのを最後に、左千夫の名は「アカネ」誌上から全く姿を消す。

以上、左千夫が「アカネ」に対して取った姿勢を見てきたが、赤彦の方はというと、彼は四十年十二月二十九日付の両角福松らに宛てた書簡で、

アシビは今後「アカネ」と改題二月一日より三井君主となりて発刊の由也盛に御出詠希望いたし候

と述べ、四十一年四月二十三日付の唐沢うし子宛の書簡では作歌を始めた唐沢から適当な入門書をたずねられて

和歌は今迄どんな雑誌御覧にや小生の御すゝめ申さんとするは雑誌にては「アカネ」（根岸短歌会機かんし）古書にては万葉集金槐集（実朝全集）田安宗武卿家集曙覧全集等明治の書物にては正岡子規先生遺稿全部ことに竹の里歌は必御一読必要と存じ候

と書いて、「アカネ」を根岸短歌会の機関誌と考え、出詠や購読を奨励しているが、それから間もない五月四日付の望月光宛書簡になると

「アカネ」の歌不振不愉快なり下手な議論ばかりしてゐるからいかぬのだ小説評など見当違也

と批判的に見るようになり、彼の出詠は四十一年五月の一巻四号を最後に見られなくなる。同じ望月光に宛てた四十二年六月十日付の書簡では、

アカネ今度の評論見る気せず中途で止め申候三井君は神経過敏の詩人に非ずして神経過敏の経営家に候文学士なる名称が誤つて彼を事業家にせし事彼は自覚して居らず悲しむべく候

とさえ言っている。

左千夫や赤彦が四十一年五月発行の「アカネ」一巻四号を最後に全く誌上から姿を消したのをはじめ、この前後から旧「馬酔木」同人のほとんどが出詠を中止、わずかに事情にうとい一部の地方在住の旧同人の作品が見られるだけとなる。

このように旧「馬酔木」同人の作品が「アカネ」に載らなくなったのには、同人たちが出詠を取り止めたという場合のほかに、編集者の甲之の側で拒んだという場合もあった模様である。斎藤茂吉は「アラ

可致候

と甲之を信頼し支持する態度で、「アカネ」創刊の近いことを知らせている。

このように左千夫は表向きは甲之への信頼を表明しているのであるが、しかし内実は、既に十二月下旬の段階で左千夫と甲之の間には対立が生じていたらしい。左千夫は「馬酔木」の一般の会員には、右の憲に宛てた手紙のように「馬酔木」対「アカネ」、左千夫対甲之の間が円滑であるかのように報じているが、赤彦や節らに宛てた書簡を見ると、深刻な対立のあったことがはっきりわかる。十二月二十二日付の赤彦宛左千夫書簡によれば、そのころ三井甲之は信州の赤彦のところまで左千夫についての不平悪口を言いに赴いたらしい。それを知らせてきた赤彦に対し左千夫は、

貴書拝見御来示ノ趣小生ニハ只意外ニ感シ申候何カ三井君ハ小生の悪口テモ申候ニヤ感情問題ナド、ハ如何ナル事ニヤ小生ニハ更ニ解リ不申候三井氏ノ雑誌ハ始ヨリ小生モ勧メタル程ニテ（中略）君カ新進ノ英気ヲ以テヤツテクレト云ヒシヨリ起コリシコトナリ

と驚きを隠さず、

三井ハ諸方ヘ小生ヲ悪口云ヒ居ルト聞キ申候ソレニテモ小生ハ猶平気ニ捨置キ申候思フニ三井ハ自分テ暗鬼ヲ見ツ、騒キ居ルニヤト思ハレ候長塚君ノ所ナトヘモ小生ノ非難ヲ長イ〳〵手紙ニ書キ送リタルヨシ、ソレデ比頃ハ小生ガ新雑誌ヲ助ケナイトカ云つテ（ママ）不平ヲ言ヒ居ル由実ニウルサク候

と長文の返事をしたためて、甲之を非難している。十二月二十九日付の節に宛てた左千夫の手紙では

三井ハ実に陰険な男だ大ニ注意を要する信州へ往つても僕の事を何とか云ふて歩いたさうだそれで僕が今度の雑誌を助けぬとおこつてゐるとの話たか僕の陰口を云ふこと非常らしい云く野菊の墓を作つてもう立派な著作家になつたつもりで居るとかそれから歌も駄目になつたとか鷗外の歌会へ出て大家気取でゐるとか人を弟子あつかひするとか随分冷酷な悪口を云ふてゐるらしい僕ハ何と云はれても平気たがそんな人間と交際するか馬鹿々々しくてならない僕の所なとへ来てくれねハよいに実にいやな男だ作物の批評でない悪口はいくらなんでもいやだ

と述べている。これによって、二人の対立の輪廓をつかむことができよう。そして、この左千夫書簡により、甲之が節に宛てて、また赤彦が左千夫に宛てて書簡を発していると推定されるが、それは共に今日伝えられていない。しかし、この左千夫の文面から、左千夫は、甲之の編集する「アカネ」には、既に創刊以前から融けこめない状況にあったことが知られ、「アカネ」発刊の八ヶ月後に蕨真が「阿羅々木」を創刊すると左千夫はその編集者として加わるのであるが、右のような事情を眺めると、左千夫らの「阿羅々木」への参加は当然のなりゆきとも考えられる。先の十二月二十二日付赤彦宛書簡の中で左千夫は、

三井君ノナス所根岸趣味ニ反スル様ナ場合ニハ蕨君ハ更ニ資力ヲ尽シテ別ニ雑誌ヲ起サントノ覚悟ヲ誓ヒテ帰国致候

と報じ、長塚節に宛てた二十九日付の手紙では、

三井ハ迚ても一年ハつゝくまいから其後ニなつて大ニ奮発する方よからん其時経費の全部を一人て負担すると云ふて帰つた

と知らせている。

「『馬酔木』終刊之消息」（「馬酔木」四巻三号　明41・1）を読むと

蕨真君長病根本より癒て健康旧に加はり、益斯道に尽さんとする

刊行する事も一月のうちに決まった。このような事情から小説家として立つ野心を強めた結果、甲之に馬酔木を任せることを考えるようになったと推測される。

この二月八日の赤彦宛書簡では、甲之の名前は出ていないが、この手紙は左千夫が馬酔木の編集の仕事を離れたいという希望を示している最も早い時期のものとして注目される。

そのような左千夫の気持もあって、明治三十六年の創刊以来、毎年七冊あるいは八冊と、比較的順調に発刊されてきた「馬酔木」は四十年になると三月に四巻一号、五月に四巻二号が出ただけで六月以後一冊も出ないまま年を越し、四十一年一月の四巻三号をもって終刊を迎えるのである。そして翌月二月に甲之の編集で「アカネ」が創刊になる。

「馬酔木」が廃刊となり「アカネ」が創刊になる経緯を、四十年十二月四日付の胡桃沢勘内宛左千夫書簡から探ると、

馬酔木ハ原稿遠に印刷屋へ廻り居候へとも不得要領にて日を過し居候或ハ年内ニ六つかしきやも知れす小生自らも頗る持余し申候三井甲之君が引受けて大にやつて見様かなと申候故相談中に候同君かやれハ売れ様（ママ）にやると申居候売れる様にとハ俗味を加へると申事に候併未た決定不致候

とあって、左千夫に馬酔木編集の仕事から解放されたい気持があったし、また、甲之側にも積極的な受け入れの姿勢のあったことがうかがえる。この手紙では雑誌の甲之への委譲は、まだ決定しかねている模様であるが、翌五日付の依田貞種宛書簡では、左千夫は、

馬酔木善後策に就き只今蕨君も上京中にて相談致居候三井甲之君か万事を引受け彩雲閣にて発行せんとの協義（ママ）まとまり申候内容従来の歌及歌論ニ加ふるに若手連の評論時文紹介欧州文壇の消息等を加へ六十四頁の清素（ママ）なるものを出す筈に候つまり今の馬酔木を拡張したるものに候二月一日を以て初刊を出す筈に御坐候小生は今後助成者の位置ニ立ち万葉新釈の稿を急ぐ覚悟に候馬酔木の名は改めた方売れるに都合よからんとの事にて改題するつもりに候へともあれかこれかと未た決定不致候得とも発行の画策ハ決定致候今日蕨三井小生と岡氏を訪問帰りに格堂をも訪問兎ニ角発展を喜び申候次第ニ候

と、この日、左千夫、蕨真、三井甲之、岡麓、赤木格堂の五人が集まって、馬酔木を廃刊にして甲之の編集で新しく文芸誌を発行することを決めたことを告げている。この手紙では、「助成者」の立場にかわって暇を得て「万葉新釈」の執筆に専念したい希望を述べているが、十二月十七日付の長塚節宛書簡では、甲之が題名をかえて新しく雑誌を出すことになった旨を報じ、「僕ハ少しく閑を得て創作に耽ることか出来るかと愉快に候」と記している。「万葉新釈」を執筆することと創作を行なうこととは共に彼の希望だったと考えられ、後日、左千夫はその両方を行なっている。なお、左千夫の「隣の家」が「ホト、ギス」十巻四号（明41・1）に掲載されているのを見ると、十二月十七日に節に宛てて、右のように書き送ったとき、左千夫は「隣の嫁」をほぼ書き上げていたものと考えられる。

十二月三十一日になると、左千夫は「馬酔木」の同人である寺田憲に宛てて、

アシヒの後継者は三井甲之氏主として之ニあたり二月一日を以て「アカネ」と改題猛然と打つて出つる準備ハ整ひ居申候アシヒは第二期の事業を段落し「アカネ」第三期の成功を責任と致し奮励

と甲之が初めて会うのは、この年九月二十日に根岸の子規庵で開かれた子規の三回忌の歌会の席上であった。このことは「馬酔木」十四号に載った「正岡先生三年忌歌会」の記事から推測される。その後、甲之は月々の歌会に出席、左千夫の指導をうけたことが「馬酔木」の歌会記事からうかがえる。左千夫は、十二月十一日に左千夫宅で開かれた歌会について、十三日付の長塚節宛の書簡で、

歌会近来何時も盛だ十一日八九人であつた大学の連中四人が熱心なのハ頼もしひ

と述べて、甲之や増田八風など大学生が根岸短歌会に加わったことに喜びを隠せない様子である。翌年一月七日付の久保田俊彦（島木赤彦）宛書簡では左千夫は、

貴兄故に明らさまに申し上げるが以前の根岸短歌会員と申候ても只今にてハ秀真義郎秋水多くは歌も作らす（出来ぬと本人は申居る）歌会へもロク〳〵出てこぬ始末に候時々歌を作られても馬酔木へ出すことの出来ないやうなものに候馬酔木の経営と云ふても長塚蕨と僕の三人にてやる訳に候其二人か地方に居る故雑誌たけハ僕一人にて万事をやるので迚てもロクなものは出来不申候現在のまゝにてもやつてゆけれは結構だと思ふ位に候併し近来ハ歌会も漸く人数が多く成つて参り候つまり僕を中心にせる会に成つてしまひ申候新加入連ハ皆大学の文科若くハ理科の生徒にて相当なる素養有之候故大に望み有之ために意外な新発展を馬酔木に示すやも計られす候故まつ多少の望ハ有ると御承知被下度候

と述べている。子規在世当時からの根岸短歌会の会員で「馬酔木」に参加した香取秀真、森田義郎、安江秋水、そのほか、この書簡には名前が出ていないが岡麓、赤木格堂、柘植潮音らがほとんど作品を寄せず、長塚節、蕨真の二人は協力的であったが、節は茨城、蕨真は千葉と地方在住のため、「馬酔木」の編集は左千夫一人が担当せざるを得ない状況にあった。そこへ、このころ東京帝国大学文科の学生の三井甲之、増田八風、佐藤紅東、理科の石原阿都志（純）の四名が加わり、左千夫は中でも甲之に特に大きな期待をいだいたのである。同じ三十八年の二月二十八日付赤木格堂宛書簡では「某大学生とは三井甲之にて、小生の二なき話相手に候。親鸞の信仰者にて甲州の人に候。」と述べ、十一月と推定される節宛書簡においては、甲之について、「甲之ハ非常に骨を折り且つ謙虚で」云々と信頼をのぞかせている。甲之は「馬酔木」二巻一号（明38・2）に某大学生の名で「雑言録　宗教と文学」、二巻二号（明38・4）に「文学と宗教」を載せている。左千夫はこの時期、宗教、特に親鸞の教えに傾倒していたので、左千夫の甲之に対する右のような信頼は、甲之の熱烈な宗教意識に対する共鳴による点が大きかったと考えられる。それと、甲之が大学生であることを格堂宛書簡等でたびたび左千夫が口にしているのを見ると、自身が高等教育を受けていなかったこともあって、東京帝国大学の学生ということに大きく心を動かされたふしが感じられる。

明治三十九年二月八日付の島木赤彦宛の左千夫書簡には

小生か馬酔木の発行を生命と致し居れハ何の事ハなく候へとも小生とて何か外にやり度き思山々に候故馬酔木のために全力を傾けること随分当惑致し候やりかけた事故小説も今少しやつて見度候新体詩も勿論に候

ということばが見える。左千夫はこの年一月の「ホトヽギス」に「野菊の墓」を発表したところ、夏目漱石から賞賛の手紙を受け取り、「読売」、「朝日」などの各新聞の批評も好意的で、俳書堂から単行本として

「アカネ」と「アララギ」対立の行方
――左千夫・赤彦書簡を通して見た――

貞光威

Differences between *Akane* and *Araragi* : As seen in the letters of Sachio and Akahiko

Takeshi Sadamitsu

正岡子規の短歌の流れを汲む根岸系歌人にとって、明治四十年代は動揺と混乱の時期であった。

子規病没の翌年にあたる三十六年に伊藤左千夫らによって創刊され、毎年七、八冊の割で比較的順調に刊行されていた根岸短歌会の機関誌「馬酔木」は、四十年になると、三月と五月に二冊出ただけで終わり、四十一年一月、四巻三号をもって廃刊となる。

その翌年には、三井甲之の編集で「馬酔木」の後継誌として「アカネ」が創刊され、根岸短歌会はこの「アカネ」に継承され、それまで「馬酔木」に出詠していた会員の多くが「アカネ」に作品を載せたのであったが、間もなく甲之と左千夫や蕨真などとの間に疎隔が生じ、それは抗争にまで進んでゆく。

この「アカネ」にあきたらぬ蕨真が明治四十一年に千葉県から「阿羅々木」を刊行すると、左千夫もこれに参加し、旧「馬酔木」同人の中にも「アカネ」からこの「阿羅々木」に移る者が多数出る。四十二年九月の二巻一号から「アララギ」と表記を仮名書きに改めた同誌は、左千夫が主宰者となり、発行所も東京の彼の家にして、旧「馬酔木」同人のほとんどが「アララギ」に移ったのであるが、「根岸短歌会」の名称は「アカネ」の側に残り、同短歌会は分裂して甲之対左千夫・斎藤茂吉らの間で対立・抗争がつづく。

一方、「馬酔木」と同じく明治三十六年に創刊された「比牟呂」は、信州という一地域を地盤とする雑誌でありながら、柿の村人（島木赤彦）の指導のもとに同人たちが結束し、地方根岸系文学誌の雄として注目されていたが、これが明治四十二年八月に、「アララギ」との合併を決定、翌九月発行の二巻一号からそれが実行された。この「比牟呂」の合併は対立、動揺の中にあった「アララギ」にとって大きな援軍となり、後日の「アララギ」発展のための基礎固めの役割を果たしたのである。

そのような意味で、根岸系短歌の歴史の上で一つの屈折期であった「アカネ」「アララギ」が対立した時期を乗り越えてゆく経過と、「比牟呂」と「アララギ」の合併に際しての歌人たちの動きを、彼らの書簡によって跡づけてゆきたい。

まず「アカネ」「アララギ」抗争の当事者となった三井甲之の「馬酔木」への加入から見てゆくことにしよう。甲之は明治十六年山梨県中巨摩郡松島村生まれ。彼が根岸短歌会に加わるのは明治三十七年で、当時彼は二十二歳、東京帝国大学学生であった。この年四月発行の「馬酔木」十号に旋頭歌二首を発表したのが出詠の初めで、つづいて五月発行の十一号に短歌二首、十一月発行の十四号に短歌三首を載せる。左千夫